2019年12月15日　中原キリスト教会

**「ツァラアトによる汚れ」**

聖書箇所:レビ記13:45-46

13:45患部のあるそのツァラアトの者は、自分の衣服を引き裂き、その髪の毛を乱し、その口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ばなければならない。

13:46その患部が彼にある間中、彼は汚れている。彼は汚れているので、ひとりで住

み、その住まいは宿営の外でなければならない。

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

今日はレビ記のなかからツァラアトについての個所から主のメッセージをいただきます。ツァラアト、というのは最近まで「らい病」と訳されていました。らい病は現在はハンセン病と呼ばれ、「らい病」という言葉は使われなくなりました。ハンセン病患者とその家族が国家賠償訴訟を起こし、長い裁判の結果、主張が認められ、議員立法により、「国会と政府」が謝罪するとともに、不法行為に関し賠償をすることになりました。ハンセン病は肌の下の筋肉が崩れる病気ですが、伝染すると信じられていたため、強制的に隔離され、断種の手術を強制され、この世から抹殺された人生を歩まざるを得ませんでした。家族もこの患者を出したということになると、周りから忌み嫌われ、遠ざけられ、患者に準じた苦しみを受けることとなりました。感染性に加えて遺伝性の病気と考えられたのです。

このハンセン病はBC7cのインド、中国で確認されており、ヨーロッパで忌み嫌われる病気として長い間、隔離をされるべき病気とされてきました。そして、この病気の聖書的根拠がこのレビ記13章の「ツァラアト」である、とされていたのです。「ツァラアト」はヘブル語です。この病については新約聖書にも出ており、ギリシャ語では「レプラ」と言います。このギリシャ語から英語の「1eprosy」が出てきています。日本語では「らい病」です。日本でも「日本書紀」にすでに「らい」という言葉が出ている、と言われていますが、明治以降、らい病の人間が他人の目に触れるのは日本の恥である、ということから、隔離が始まりました。おそらく伝染する、ということより、見た目が悪い、気味が悪い、というような感情的要素が大きかったのではないか、と思われます。1873年にすでに、この「らい病」の原因となる菌がノルウェーのハンセンによって発見され、感染力は極めて小さい、ことがわかっていました。しかし「らい病」に関する誤った理解は正されず、1909年には国立の療養所ができ、強制的収容がされ、1915年以降は断種がなされ、療養所の中ではほぼ囚人同様の生活でした。患者のいた家や触ったものは徹底的に消毒されたので周りの人にすぐわかります。これが戦後にも続いたのです。特に問題だったのは1931年の「癩(らい)予防法」成立後、「無らい県運動」が推進されたことです。これは「らい病」患者を探し出し、療養所に送り、「らい病」のない県にしよう、という運動です。これにはキリスト教団体も積極的に協力しました。この時も聖書のレビ記13章が引き合いに出されていたようです。1996年にいたってやっと「らい予防法」が廃止になりました。しかし、患者、遺族への援助は小さいものであったため、1998年熊本で訴訟が提起され、2019年に熊本地裁で「らい予防法」の違憲、国の不作為への賠償が判決され、国が控訴をやめたため判決が確定し、先般、議員立法で解決が図られることになりました。実に、長い、長いプロセスでした。キリスト者にとっての問題は、国の責任だということで自分たちは、責任はない、と知らぬ顔をしていてよいのか、という問題です。

では聖書のなかに入っていきましょう。レビ記13・14章は「ツァラアト」に関しての個所です。この個所は11章に始まる「汚れ」に関する律法の一部となっています。最初は食物規定であり、特定の食物は汚れた物として食することが禁じられています。有名なのは「ぶた」が「汚れた物」とされていることです。この後、産後の女性は一定期間「汚れた」ものと扱われることが述べられ、そのあと、この「ツァラアト」の個所です。2章にわたっており、この「汚れ」に関する記述の中では最も多くの分量を占めています。「ツァラアト」のあとは、「性的漏出」と言い、男性が精液を漏らすことにより汚れる、ということと、女性の月経により一定期間汚れる、とされることが書かれています。そして「汚れ」に関する最後は「贖罪の日」にはどのような儀式をしなければならないかについて書かれています。

まず、「ツァラアト」とはどのような病気なのでしょうか。13:2-3をお読みします。「ある人のからだの皮膚にはれもの、あるいはかさぶた、あるいは光る斑点ができ、からだの皮膚にツァラアトの患部が現れたときは、彼を、祭司アロンか、祭司であるその子らのひとりのところに連れて来る。/祭司はそのからだの皮膚の患部を調べる。その患部の毛が白く変わり、その患部がそのからだの皮膚よりも深く見えているなら、それはツァラアトの患部である。祭司はそれを調べ、彼を汚れていると宣言する。」とあります。皮膚のはれものやかさぶたや光る斑点ができるとこれは「ツァラアト」の兆候であり、祭司が見て、これら兆候・患部が出ている箇所の毛が白く変わり、その患部が皮膚より深く見える場合、「ツァラアト」である、というのです。「患部が皮膚より深く見える」とはどういう状態でしょうか。新改訳はヘブル語の直訳です。皮膚より窪んでいる、ということでしょうか。皮膚の下深くから出てくるような、ということでしょうか。患部が皮膚より下に及んでいる、ということでしょうか。13:4にも同じ表現が出てきますが、いくつかの日本語訳を見ると様々ですが13:10には「はれものに生肉が盛りあがっている」という表現がありますので、患部の周りの肉が盛り上がっている、即ち、患部は周りの皮膚より窪んでいる、と解釈できそうです。毛が白くなり、かさぶたのような患部が窪んで、周りの肉が盛り上がっている、という現象です。これは、ハンセン病の症状ではありません。ハンセン病も「象皮病」と言われ、皮膚が、白みがかった状態にはなりますし、場所によっては、皮膚が盛り上がりますが、毛が白くなる、とか皮膚のくぼみにかさぶたができる、というようなことはありません。ハンセン病の最大の特徴は筋肉が崩れることです。

さらに、レビ記では衣服のツァラアトや家のツァラアトについても「汚れ」の印としています。衣服のツァラアトにっいては、患部は「緑がかったり赤みを帯びたり」している、と言われています。家のツァラアトにっいては、やはり「緑がかったり赤みを帯びたくぼみであって、その壁より低く見える」と言われています。これらは、カビの一種ではないのか、という推測がでてきます。ツァラアトの人を隔離しなければならない、とは言われていますが感染病であることを推測させる個所は全くありません。旧約の律法では「汚れたもの」に触ると「汚れる」とされていますから隔離の必要が発生したのです。

更に無視できないのは慢性のツァラアトについてです。13:10-11には「祭司が調べて、もし皮膚に白いはれものがあり、その毛も白く変わり、はれものに生肉が盛り上がっているなら、それは、そのからだの皮膚にある慢性のツァラアトである。祭司は彼を汚れていると宣言する。しかし祭司は彼を隔離する必要はない。彼はすでに汚れているのだから。」とあります。慢性のツァラアトの場合、汚れてはいるけれど隔離する必要はない、と言っています。これは、増殖する時期をすでに終わっているので、汚れが伝播することはもうないので隔離の要はない、というのだと思われます。病気の感染の話と汚れの伝播とは基本的に違うのです。慢性のツァラアトの場合は、他人に汚れを伝播させる生命力を失っている、ということと考えられます。皮膚全体のツァラアトについてはさらに奇妙なことが言われています。13:12-13です。「もしそのツァラアトがひどく皮膚に出て来て、そのツァラアトが、その患部の皮膚全体、すなわち祭司の目に留まるかぎり、頭から足までをおおっているときは、/祭司が調べる。もしそのツァラアトが彼のからだ全体をおおっているなら、祭司はその患部をきよいと宣言する。すべてが白く変わったので、彼はきよい。」と言われています。体全体にツァラアトが及ぶようなことになったら、祭司は「きよい」と宣言する、というのです。すべてが白くなったので「清い」というのです。これ以上増殖することはないのだから、ここでツァラアトの力は失われ、「汚れ」は消滅したのと同様になっている、ということでしょう。ここまでくると、ハンセン病、かつてのらい病との共通性はみじんもありません。そもそもツァラアトは汚れの原因とされてはいますが、病気とされているのかどうかも怪しいです。一応病気と認めたにしても、伝染病であるとか、遺伝する、というようなハンセン病にまつわる迷信とは全く無関係です。

しかし、今に至るまでツァラアトは何の病気を指しているのかはわかっていません。どうも私にはツァラアトとハンセン病は、全く別物と考える方が聖書に忠実なように思えるのですが、それなら、ツァラアトは新約の時代以降、どこに消えてしまったのか、という疑問がおきます。衣服や家のツァラアトはカビの一種ということで良いのですが、人のツァラアトは聖書の解釈を変更し、ツァラアトはハンセン病を含むと解釈するのが正しいのか、ということになります。聖書のツァラアトの描写は細かな症状を示しているわけではありませんから、解釈の仕方で、人のツァラアトにはハンセン病を含むとする解釈もできないことではありません。しかし、かなり無理したヘブル語解釈をしなければなりません。結局、ツァアラトが何か、がはっきりするまでは、ハンセン病はツァアラトの一種という理解が妥当なところかもしれません。

ではどうして、ツァラアトが「らい病」と言われる病気と同一視されることになったのでしょうか。おそらく、ギリシャ語訳に問題があったのだと思います。翻訳の時点で、BC2cに、症状が類似しており、患者が隔離されると言う対処方法が同じだった「レプラ」という言葉に訳されました。ギリシャ語訳の当時「レプラ」は何を意味していたのかはよく分かりません。ハンセン病は、当時は「エレファンティアシス」(象皮病)と言われていましたが、中世において「レプラ」と一体化し、その時に、ツァラアト=レプラ=ハンセン病、ということになったと推測されています。新約聖書における「レプラ」は旧約聖書のツァラアトのことを指していることは明らかですから、ギリシャ語訳の伝統に基づき「レプラ」としたところに問題の出発があったのだと思います。ツァラアトはアラム語では「segi:r」ですから、新約聖書でのアラム語利用と同様にアラム語をそのまま使用すると問題はここまで深刻なことにはならなかった、のではないでしょうか。ちなみに英語訳は未だにギリシャ語「レプラ」からきた「leper」が生きています。日本語の翻訳は近年に至って変遷をしています。文語訳、口語訳はずっと「らい病」でしたが、カソリック、プロテスタント合同での翻訳である新共同訳で「重い皮膚病」という訳語になりました。カソリックは当初から「重い皮膚病」だったようです。新改訳は当初は「らい病」のままでしたが、第三版で「ツァラアト」に変更しました。新約の「レプラ」も「ツァラアト」にし、今に至っています。共同訳の方は最近出た聖書協会共同訳では「既定の病」という何を言っているのか分からない言葉になりました。こんな言葉を使うのなら、新改訳と同じに「ツァラアト」にすればよいのに、と思います。そもそも「重い皮膚病」という訳はおかしかったのです。なにもツァラアトは皮膚病としても重いものでもなんでもなく、レビ記の当時、重大な「汚れ」の現れ、とみなされた、という宗教的意味の事柄であったというだけです。

ではそもそも「汚れ」とはなんなのでしょう。食物規定が「汚れ」と関連している代表的なものです。以前、あるユダヤ教ラビが書いた本を読んだとき、食物規定をなぜ守らなければならないか、について記していました。健康上の理由とかなんとか言われているが、つまるところ神の命令だから守りなさい、という以上の説得的説明はない、というものでした。イスラムにおいても食物規定は重要です。なんでもOKという中国文化圏の人々にとっては理解できない話です。「なんでもOK」という生き方は神を軽んずる態度につながりやすいので食物規定のような「タブー」を持つ必要があるのだ、という考えもわからないではありません。インドに端を発する仏教もかなり強い食物規定を持っていました。しかし、大乗仏教の流れの中で、食物規定は特定の聖職者だけの話になりました。ユダヤ教から分岐したキリスト教においても律法の揚棄の一つとして食物規定が廃棄されました。ユダヤ教のなかで、なぜ「汚れ」は問題なのでしょう。それは神の命令に反しているからです。神の命令に反することは「罪」です。要するに、罪を犯してはならない、ということなのです。汚れの反対語は清い、です。清くなるには聖別しなければなりません。聖別は神の前に清いものとして他と分ける、ことです。ツァラアトは汚れの印ですから、これを分離し、祭司が聖別し、清くする儀礼が必要になる、という訳です。この罪、汚れ、聖別、清めの流れに関してはキリスト教も同じことです。したがって、レビ記におけるツァラアトの部分を罪に関することである、として読めば、現代のキリスト者についてもあてはめることができます。「罪の印が現れたら、これを分離し、広がらないようにしなさい。一人になって自分の罪のことに思いをいたしなさい。早く悔い改めて社会生活に戻りなさい。慢性的に罪を犯しているような人は外部から見ても罪びとである、とすぐわかるので、他人に影響を与えることはもはやないから、社会生活から排除する必要はない。もし、自分の罪が広がっていき、ついに、罪にまみれるような状態になり、自分が罪の深みに落ちている、と深く自覚すれば、それは逆に神の目から見て清い者とされていることを意味している。ポイントは罪の自覚の深さである」と言い直すことができるのではないでしょうか。

この「汚れ」は抑制的に解釈しなければ大変な事態を引き起こします。この「らい病」の問題もそうです。そものもの聖書の記述は、伝染病のような表現もなく、ましてや遺伝するというような記述もありません。しかし、「ツァラアト」は「汚れ」の印とされ、これに触ると自分も汚れる、とされたため、「らい病」患者を忌み嫌い、不吉の象徴とされ、ひどい差別的状況をうんだのです。人間には魔術的な力を恐れる気持ちがありますが、他方で、この魔術的力に大いなる関心もあります。この魔術的なことは想像力の世界でどんどん広がり、最後は罪のかたまりのようなことまで引き起こします。そもそもの意味からかけ離れ、噂は噂を呼び、黒雲のように広がっていくのです。この「らい病」問題はそのような不条理な罪悪、「呪い」を見ているような気持になります。千年以上の歴史の中で、「ツァラアト」が魔術的な「汚れ」として扱われ「らい病」に係る悲劇を生んでいったのです。聖書にも「呪い」という言葉がしばしば登場しますが魔術的になることを随所で戒めています。世の中でそのような魔術的なことが、罪の塊になりそうに思われる時、私たちキリスト者は警告の声をあげる必要があるのだろう、と思います。

新約聖書でもツァラアトについて記されています。主イエスがツァラアトの人をいやした個所が有名です。マタイ、マルコ、ルカのそれぞれにこの話が記録されていますが、ここではルカ福音書をみます。5:12-14です。「さて、イエスがある町におられたとき、全身ツァラアトの人がいた。イエスを見ると、ひれ伏してお願いした。「主よ。お心一つで、私をきよくしていただけます。」/イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐに、そのツァラアトが消えた。/イエスは、彼にこう命じられた。「だれにも話してはいけない。ただ祭司のところに行って、自分を見せなさい。そして人々へのあかしのため、モーセが命じたように、あなたのきよめの供え物をしなさい。」とあります。ルカ福音書には「全身ツァラアトの人」といっていますから、レビ記で言えば、レビ記13:13の「ツァラアトが彼のからだ全体をおおっている」人に該当します,ここで「罪の悔い改め」即ち、神に立ち返る、即ち、神にすべてをゆだねる信仰が加われば、神の前で「清い」と宣告される直前にあります。そしてこの人は「主よ。お心一つで、私をきよくしていただけます。」と主イエスに告白しました。全能の主なる神を信じます、という告白です。病気を治してください、というのではなく、主イエスが「きよくする」力を持たれている方であると信じます、という告白です。そして主イエスは「わたしの心だ。きよくなれ」とおっしゃられた、というのです。御心の表明です。「病よ、去れ」ではなく、意思表示だけなのです。ツァラアトを病気の一つとして扱われているようには見えません。「清くなる」素地は整っているのです。そしてレビ記の規定に従った儀礼を受けよ、と言われています。これは確認以上の意味は持っていません。レビ記の場合も祭司は、宣言はしますが「すべてが白く変わったので、彼は清い」と言われており、祭司の儀式で何かが変わったのではありません。聖書における儀式は何かを確認するとか、記憶にとどめる、とか、過去のことを想起するための手段です。レビ記の場合、ツァラアトに対するきよめは14:1-9に定められています。14:5-7で「祭司は、土の器に入れた湧き水の上で、その小鳥のうちの一羽をほふるよう命じる。/生きている小鳥を、杉の木と緋色の撚り糸とヒソラといっしょに取り、湧き水の上でほふった小鳥の血の中に、その生きている小鳥といっしょにそれらを浸す。/それを、ツァラアトからきよめられる者の上に七たび振りかけて、彼をきよいと宣言し、さらにその生きている小鳥を野に放す。」とあり、湧き水と小鳥の血が登場します。水と血です。この二つがきよめの確認の儀式に使われるものだったのです。血は命ですから水により命をきよめる、という意味をもつものと考えられます。これが洗礼に至るのでしょう。

このように聖書に沿ってみていくと、なぜヘブル語の「ツァラアト」がギリシャ語の「レプラ」と訳されたのか、そして、日本語では「らい病」と訳されるようになったのか、ということが強い疑問となって浮かび上がってきます。今まで見たように「ツァラアト」は伝染病とか遺伝性の病気である、と思われる記述は全くありません。隔離というのも症状が広がりつつあるときだけで、主イエスが治されたツァラアトの人は隔離もされていません。唯一問題は「汚れた者」とされたということだけです。中世キリスト教社会で、これが拡大解釈され、忌み嫌われるようになり、はては、強力な遺伝性の伝染病と思われ、永久的に隔離され、断種される、というところにまで至ってしまったのです。レビ記をちゃんと理解し、主イエスがなされたことを見れば、こんな馬鹿げた病気ではない、ということは分かるはずだったのです。「汚れ」に関する律法の問題は主イエスが解決された問題です。ハンセン病が遺伝性ではなく、感染力が極めて弱い、ということがわかってからもかなりの期間、この状態が、続いていたのです。そして日本では西欧人に対する見栄から、この隔離政策が推進されたのです。じつに、聖書の解釈、翻訳がこのような、信じられないような事態を引き起こす原因となったのです。

最後に、申し上げたいのは、この「らい病」の歴史に関連したキリスト教会の責任の問題です。「ツァラアト=レプラ=らい病」の理解に基づいて、隔離政策を支援してきた責任はまぬがれません。療養所において多くのキリスト者が献身的サポートを行ったことは大変な功績です。主が喜ばれたことは確実と思います。私の家の近くにある、多摩全生園において聖公会の宣教団のなされたことには頭が下がります。しかし、他方で、隔離を正当化し、むしろ積極的に「無らい県運動」を進めたことも事実です。消極的に受容した、というにとどまっていたのではありません。今のところ戦争責任に関する「戦責告白」のようなことがなされたことも聞いていません。好意的に考えれば、皆から嫌悪されて生きるよりは、隔離され別世界で生活する方がよいだろう、という気持ちが働いたのかもしれません。これま、1民地のキリスト者に「ともに西欧の植民地主義からの解放をめざしましょう」と言ったキリスト教指導者と似ています。主観的な意図と歴史的意味の乖離が存在するのです。私たちキリスト者は我々の先達(せんだつ)が犯した善行を評価するとともに歴史的役割における罪ある行いも批判する責任があります。差別と言われる事柄には必ずこの複雑さがありますが、共同体としての悔い改めを躊躇すべきではありません。主は悔い改めの心を軽んじられることはありません。祈ります。

（御在天の父なる御神様、今日はレビ記における「ツァラアト」に関する個所を見ました。このところの解釈がいわゆる「らい病」に係る悲劇につながっていきました。キリスト教会がらい病患者への偏見を助長したことは事実です。どうか、私たちが悔い改めの実を結び、偏見に基づく差別をなくしていく者となることができますよう、力をお与えください。主イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）